

『野菊の墓』 伊藤左千夫

母が永らくぶらぶらして居たから、市川の親類で僕には縁ゆかりの従妹いとこになって居る、民子という女の児が仕事の手伝やら母の看護やらに来て居った。僕が今忘れることが出来ないというのは、その民子と僕との関係である。その関係と云つても、僕は民子と下劣な関係をしたのではない。

僕は小学校を卒業したばかりで十五歳、月を数えると十三歳何ヶ月という頃、民子は十七おそだけけれどそれも生れが晩おそいから、十五と少しにしかならない。瘦やせぎすであつたけれども顔は丸い方で、透き徹るほど白い皮膚あかみに紅味をおんだ、誠に光沢つやの好い児であつた。いつでも活々いきいきとして元気がよく、その癖くせ気は弱にくくて憎にくげの少しもない児であつた。

勿論僕とは大の仲好しで、座敷を掃くと云っては僕もの所をのぞく、障子をはたくと云っては僕の座敷へ這入はいってくる、私も本が読みたいの手習がしたいの云う、たまにはハタキの柄えで僕の背中を突いたり、僕の耳を摘まんだりして逃げてゆく。僕も民子の姿を見れば来い来いと云うて二人で遊ぶのが何より面白かった。

母からいつでも叱られる。

「また民やは政の所へ這入はいってるす。コリアさつさと掃除をやつてしまえ。これからは政の読書の邪魔などとしてはいけません。民やは年上の癖に……」

などと頻しきりに小言を云うけれど、その実母じつも民子をば非常に可愛がつて居るのだから、一向に小言がきかない。私にも少し手習をさして……などと時々民子はだだをいう。そういう時の母の小言もきまっています。

「お前は手習よか裁縫さいほうです。着物が満足に縫えなくていちにんまえは女一人前として嫁にゆかれませんか」

「この頃僕に一点の邪念が無かったは勿論もちろんであれど、民子の方にも、いやな考えなどは少しも無かったに相違ない。」

しかし母がよく小言を云うにも拘かかわらず、民子はなお朝の御飯だ昼の御飯だというのは僕を呼びにくる。呼びにくる度に、急いで這入はいって来て、本を見せるの筆を借せのと云ってはしばらく遊んでいる。その間にも母の薬を持ってきた帰りや、母の用を達たっした帰りには、きつと僕の所へ這入はいってくる。

テキストは「青空文庫」をもとに加工しています。

https://www.aozora.gr.jp/cards/001168/files/46669_25695.html